意外に身近な（？）フランス教育史

越水 雄二（こしみず ゆうじ）
（大学社会学部准教授）

フランス教育史との接点

フランス教育史を私は研究しています。日本とフランスの教育面でのつながりをご存知の方は多いかもしれません。高校の日本史では、近代的な学校制度が明治5年の学制発布に始まり、フランスをモデルにしていたと学びます。他方、漫画や宝塚歌劇で『ベルサイユのばら』を楽しんだ方や、フランス革命に関わる小説や映画に感銘を受けた方もおられるでしょう。それらの歴史ドラマで光は当たりませんが、革命期には教育が重要な社会問題として議論されていました。

19世紀フランスの歴史家ミシュレは、「まごころこめて民衆の教育に専念した唯一の政府は、大革命の政府であった」（大野一道訳『民衆』原著1846）と語っています。現代の高校教科書の一冊は、「今日の初等教育の基本形態である公教育制度という考え方は、フランス革命のときに始まっていた」（東京書籍『世界史A』2012）と記しています。そうした公教育思想の起源は、18世紀後半の啓蒙思想家へ遡られるのが通説です。

シャルル・ロランの教育論

1789年の革命を機にフランスでは国家が公教育制度の建設に着手しました。その前史を私は探っています。具体的にはここ数年、シャルル・ロランCharles Rollin（1661―1741）が18世紀前半に公刊した『トレテ・デ・ゼテュード』*Traité des études*（1726―28）と呼ばれる書物の内容を考察し、19世紀へかけて受容も解明しているところです。原語の*Traité*（トレテ）とは「概論」、*des études*（デ・ゼテュード）とは「学業についての」といった意味ですが、この通称に定訳はまだありません。

刃物職人の子ロランは、幼い頃、ある修道士に才能を見出され、奨学金を得て学問の道へ進みました。パリ大学に付属する中等学校であるコレージュ collège に学び、大学は神学部で研鑽を積みました。彼は27歳にして諸学の第一人者が公開講義を行うコレージュ・ド・フランスで雄弁術の教授に任命され、その後、パリ大学の学長に2度も選出されます。

しかし彼は、信奉するジャンセニスム Jansénism がローマ教皇に禁じられ、国王と教会から弾圧されて大学を追われました。晩年は著述に専念し、『人文学を教え、学ぶ方法―知性と心につなげて』と題する書物を発表します。これが次第に『トレテ・デ・ゼテュード』の通称で広く知られるようになりました。

ロランは当初その本を、コレージュで教育される人文学の内容を扱う、①言語・②詩学とホメロス読解・③修辞学・④雄弁術・⑤歴史・⑥哲学の6編と、生徒指導や校長と教師の職務を論じる編との7編で書いていました。この目的は、若い教師や勤勉な若者たちへ学問の手引書を示すことでした。ところが刊行にあたり、周囲から就学前段階と女子の教育についても論じるように求められ、それらを述べて巻頭に据え、全8編から成る教育論を完成させて上梓したのです。

注目すべきは、ロランがこの本を、学問の国際共通語であるラテン語ではなく、「すべての父親や、母親でも読めるように」フランス語で執筆した点です。「学問が新たに学ぶ者へ行き渡るにつれて、人びとを別の人間につくり変えるのは、日々、目にされている。（中略）学問が国民の運命を決めるように思われる」と述べる彼は、学問をより広く普及させる公教育を目指していました。

ロランはその書で、パリ大学のコレージュで行われている教育を忠実に伝えるのが目的であり、わずかな点を除けば、新しい学習計画や指導方法を提案する意図はないと謙遜しています。とはいえ、彼が新たに主張した「方針としてフランス語を学ぶ必要性や、歴史により多くの時間を割くこと」は、後の教育史の展開に大きな影響を与えていったのです。

革命前夜の約四半世紀の間、パリ高等法院は管内のコレージュ改革に取り組みました。それを推進した官僚ロラン・デルスヴィル Rolland d'Erceville は、新たな教育課程を『トレテ・デ・ゼテュード』に求めたのと同時に、全住民を対象とする初等学校の設立も構想しました。やがて革命を経て、公教育制度が現実に築かれていく過程では、人びとを国民としてまとめるためフランス語とフランス史の教育が重視されました。こうした側面において、シャルル・ロランの教育論は、今日の公教育制度へと連なる方針を先駆的に唱えていたと言えるでしょう。

新たなフランス教育史を求めて

シャルル・ロランの教育論は、これまで日本では本格的に研究されていません。その理由は、フランス革命期の新しい公教育構想に直接結び付く啓蒙思想家たちの範疇に、ロランは属さないからです。

しかし、17世紀後半から18世紀前半における代表的古典人文学者のロランは、学問と道徳と信仰を育む教育の理想を、18世紀後半すなわち啓蒙思想の最盛期に活躍する世代へ提示していました。ヴォルテールもルソーも『トレテ・デ・ゼテュード』を読んで高く評価したのです。19世紀前半には、文部大臣を務めた文芸批評家ヴィルマンが、文学講義でロランを「教育の真の聖者」と讃えています。

フランス近代教育史は、シャルル・ロランの著書とその受容をめぐる研究を通じて、啓蒙思想の進展のみではなく、西洋古典人文学の継承と信仰の尊重という観点からも、より多面的に捉えられます。新たなフランス教育史像の探究が、今後の教育の在り方を考える上にも細やかな示唆を与えてくれるように祈りつつ、文献の解読に四苦八苦する毎日です。

常識を持ったコンピュータの実現に向けて

土屋（つちや） 誠司（せいじ）
（大学理工学部准教授）

人工知能の世界と現状

私の研究は、大きく捉えると人工知能に関する研究です。知能ロボットの実現を視野に、ハードウェアではなくソフトウェアの部分、人間でいう「頭脳」にあたる部分の研究を行っています。

科学技術の進歩は目覚ましく、私が同志社大学に入学した頃はインターネットが普及しておらず、ようやくWindowsが市民権を得たぐらいの時代でした。それから20年弱の間にインターネットはなくてはならないものとなり、当時のパソコンを遥かに上回る性能のスマートフォンが皆さんの手の中にある状況にまでになっています。そんな中、自動車メーカーのホンダからは二足歩行ができるロボット「ASIMO」、電機メーカーのソニーからは犬型ロボットの「AIBO」が登場しました。さらに２０１５年には、携帯通信キャリアでお馴染みのソフトバンクから人型ロボット「Pepper」が一般の人にも手が届きそうな価格で発売される予定で、ＳＦ映画やアニメの世界のようにロボットがこれまで以上に身近な存在になろうとしています。あと数年すると一家に1台ロボットがいる光景が普通になり、なくてはならない存在になるかもしれません。

このように、目に見える部分であるハードウェアは非常に進歩しています。しかし、目に見えない部分であるソフトウェアは、これほどまでには進化できていません。確かに、インターネットでの検索も、新幹線の制御も、ロケットを飛ばすのももちろんソフトウェアの賜物ですが、一般家庭におけるロボットの「頭脳」として要求される機能を実現するまでには至っていません。

ロボットが家に居る生活を想像してみましょう。朝起きて「おはよう」と挨拶すると、ロボットも「おはようございます」と挨拶をしてくれます。「今日の予定は？」と聞くと「本日は、９時からデスクワーク、13時から会議です」と予定も教えてくれます。予定をアナログの手帳からデジタルでの管理に変えれば簡単に実現できるでしょう。出社して、会議で散々絞られて、疲労困憊で帰ってきました。「ただいま」「部長に怒られちゃって」と愚痴の一つも言いたくなります。するとロボットは、「お帰りなさいませ」「そうですか」。現在の技術では、定型のことをしゃべらせるのが精いっぱいで、非常に冷たいものになってしまいます。

無機的なロボットをもっとフレンドリーに、もっと温かいものにしなければ、いくらハードウェアが素晴らしいロボットであったとしても、家で一緒に暮らすことはできません。そこで、私の知識情報処理研究室では、渡部教授と毎年約40人もの学生と一緒に、無機質なロボットを有機的な存在にするべく、どうすれば人と共存できるロボットになるのかを「常識」という切り口から研究しています。

常識を理解させる難しさと面白さ

先の人とロボットとの会話で「部長に怒られちゃって」という発言の例がありましたが、人がこの発言を聞いたらどう答えるでしょうか？「最悪な日だったね」とか「ゆっくりお風呂にでも入ってリフレッシュしたら」などと言って、その人を慰めようとするかもしれません。この「慰める」という行為は、その人の気持ちや感情を理解しなければ決して行うことができないものです。部長という自分を管理している立場の上の人から怒られるというストレスを感じ、嫌な気持ちになる行為を受けたことから、この人は悲しみ、へこみ、疲れていることを理解し、この辛い状況を回避する一つの方法として、共感して慰めてあげる必要があるのです。また、お風呂に入ることは気持ちいいことであり、気持ちを切り替える一つの方法としてよく行われる行為であることも理解しておく必要があります。

このようなことは、人間であれば無意識のうちに、いとも簡単に瞬時に判断して行動できます。しかしコンピュータにとっては、例に挙げたように一つひとつを細かく解析し、それらの結果を統合して最終結果を出していく必要があり、非常に難しい仕事です。また、同じ状況であったとしても「慰める」だけではなく、時には「叱咤」することもあるでしょう。どう対応すべきかは、時と場合にもよりますし、相手にもよります。非常に難しい判断が要求されます。

その上、どうすべきかという問いに対する回答は、辞書にもインターネットにも正確には書かれていません。つまり、機械的に学習できるものではないのです。例えば、「自分の好きなものは恋人も喜んでくれる」という考え方をルールとしてコンピュータに教えたとします。すると、「僕は納豆が大好きだから、彼女の誕生日にはいっぱい納豆をプレゼントしてあげよう！喜んでくれるに違いない!!」というとんでもない行動をとることになってしまいます。納豆ではなくケーキであれば何の問題もないのですが…。辞書やインターネットに載っていることを機械的に学習する機能は、現在の人工知能でも実現することができます。しかし実は、それ以外の「どこにも書いていないけれども、普通に考えればこうなるよね、こうすべきだよね」といった「常識」が重要な役割を果たします。この「常識」がなくては、ロボットと一緒に暮らすことは難しいでしょう。しかし、この「常識」をコンピュータ上で実現することもまた難しいことなのです。

私の知識情報処理研究室では、人間の連想機能をシミュレートすることで常識というものを少し再現できつつあります。課題は山積みでまだまだ研究が必要ですが、だからこそ面白い分野です。また人工知能の研究を通して、人間の凄さ、素晴らしさを改めて感じると共に、「自分はちゃんと人間でいることができているのか」と自分自身を省みる良いきっかけにもなっています。

「感情って何？」

鈴木 直人（すずき なおと）
（大学心理学部教授）

感情というテーマ

私の研究テーマは『感情』です。われわれは日常、色々な出来事に対して怒ったり、悲しんだり、あるいは喜びを感じて生活しています。このように感情という現象は、誰でもが経験し、知っているものです。ところが、それがゆえに、感情に関する研究は非常に難しい立場におかれています。読者の方々には理解し難いかもしれませんが、ブリティッシュ・コロンビア大学のラッセル教授が〝Everyone knows what emotion is, until asked to give an definition.〟と指摘しているように、感情を心理学的に定義しようとするとうまく定義できません。

感情にはいろいろな側面があります。まず第1に感情は主観的な現象です。ある場面で、貴方が怒りを感じたとすれば、「誰もこの場面で怒る人はいない」と指摘しても意味がありません。それは怒りが喚起されたのであり、それ以外の何ものでもありません。先日、ブログを見ていたら「笑うネコ」という写真がありました。このネコは本当に面白くて笑っているのでしょうか。偶然笑ったように見える一コマを切り取ったものか、ネコは「ニャン」とも答えてくれません。

感情はいつも同じとは限らない

第2に、感情は、状況に適した行動をとることができるように生体の準備をする生物学的反応であるという進化論的側面です。キャノンの闘争-逃走反応がそれに当たります。ここで問題なのは、感情反応は誰にでも同じように起こるわけではないという問題です。恐怖の感情を引き起こすためにホラー映画やオカルト映画、あるいは不快写真などがよく使われます。しかしながら、これらを見て恐怖を感じる人もいれば、不快感を感じる人、中には面白いと思う人さえいます。つまり同じ刺激に対し、同じ反応が生じないことがあるという問題です。また、さらに同じ人が、同じ刺激を見たとき、いつも同じ感情が引き起こされるとは限らないという再現性の問題もあります。このように、感情は公共性、再現性が低いという問題のため、近代心理学の分野になじまないものとして扱われてきました。

その他に感情には機能的な側面や社会的な側面があります。紙面の都合で詳細を省きますが、感情はいくつかの側面を持っているため、どれか一つの側面を説明できたとしても、感情全体の説明になりえないのです。

〝fear〟は〝恐れ〟？

もう一つ感情を研究する上で非常に厄介な問題があります。それは言葉の問題です。例えば、日本語の〝恐れ〟を意味する言葉として用いられる英単語は〝fear〟ですが、両者は同じ感情を表しているのでしょうか。〝fear〟は殺されそうになったというような非常に強い感情状態を表すのに対して、日本語の〝恐れ〟は、夜道を歩いていて怖かったといったように、必ずしも同じ感情状況で使われていません。そして往々にして、日本とアメリカでは文化の違いがあるため恐怖に対する反応が違うのだというような考察がされてしまいます。このような例は他にもいくつかあります。つまり、感情語は日常よく使う言葉であるため、専門用語として用いるとき、日常語の影響を受けざるを得ないという問題です。筆者は、今こうした問題をなくすため、残り少ない研究生活を「感情用語辞典」の作成に向けようと思っています。

感情はナウいテーマ

最近、諸分野が感情を研究テーマとして扱い始めました。ロボット工学の発展はアンドロイドなどの極めて精巧な人型ロボットを作り出し、〝感情〟を持たせる試みも行われるようになってきました。しかし人の「〝感情〟とは何か」という解答はまだ出されていません。中川いさみ氏が描いた4コマ漫画「体験バーチャル・リアリティ（仮想現実）」に、クマのプー太郎がバーチャル・リアリティでヨーヨーを体験し、「本当みたいだ！」と感動して買って帰り、「本物のヨーヨーを買えばよかった…」と後悔しているという漫画があります。講演会でこの漫画を文系の人に見せると多くの人が〝にやっ〟と笑うのに対し、理系の人は何がおかしいのかといった顔をするのが印象的です。技術の素晴らしさとは別に、プー太郎が感じた心の在り方、そして最後の一言こそ、まさに人間的な反応であり、感情なのです。

感情を知ることこそ人間を知ること

感情というのは非常にあいまいで研究し難い存在です。しかし、人間の最も人間らしい部分であることもまた事実です。人間行動に大きな影響を与える感情を解明しなくては、本当の意味で人間を理解したことにならないのではないかと思います。感情に関する研究に長い歴史と蓄積を持ち、人間の研究にノウハウを持つ心理学は、感情や人間理解の研究をリードしていく責務があります。感情という現象は、表情などに表出されなくても内臓活動には反応が出ている人、逆に大げさな表出行動の割には、内臓活動にはほとんど影響のない人、主観的には感情を感じていなくても行動や自律反応、脳では何らかの変化が生じているということがあります。感情はきわめて多面的な現象です。感情を真に理解するためには、主観的な側面からだけでは不十分です。生理学的側面、神経科学的側面からだけでも足りません。行動的な側面も含めた多角的な側面からの検討が必要です。こうした多角的な研究をできる限り同時進行で行わないと、益々「感情って何？」という問いの答えを混沌とさせることになってしまうのではないでしょうか。

笑うネコ
http://ameblo.jp/tatuya01/entry-10666312309.html

「文学研究と教育」

玉井 史絵（たまい ふみえ）
（大学グローバル・コミュニケーション学部教授）

1 私の研究

私の研究テーマは主に三つあります。一つ目は十九世紀イギリス文学における帝国主義、異文化表象の研究で、チャールズ・ディケンズを始めとするさまざまな作家の作品を、ポストコロニアル批評を用いて検討してきました。『クリスマス・キャロル』に代表されるようなヒューマニズムの作家として知られるディケンズですが、当時「野蛮」とされた植民地の人々やロンドンの貧民に対する差別的な表現を含むエッセイや手紙も数多く残しています。このギャップはどこから来るのかという素朴な疑問がこの研究の出発点でした。ポストコロニアル批評とは、植民地解体後の視点から文学作品を再読し、文学がいかに異文化の人々という「他者」を構築してきたかを検証する試みです。この分野を確立するのに多大な貢献をしたエドワード・W・サイードは『文化と帝国主義』のなかで、「帝国主義と小説は、一方を考察せずにもう一方を語ることはできないぐらい、互いに強く結びついている」と述べています。小説は帝国主義という文化に大きな影響を受けると同時に、帝国という概念を構築する上で大きな役割を果たしてきました。私はディケンズと帝国との関わりを研究するなかで、文学と社会との相互作用を強く意識するようになりました。

二つ目の研究テーマは十九世紀イギリスにおける文学と教育という問題です。同志社で教鞭をとるようになり、自分が日々関わっている「教育」という営みの意味を考えるうちに、自然にこのテーマへと関心が向いていきました。十九世紀は識字率の向上とともに文学が大衆に広く普及した時代であり、作家たちは新しい読者層に向けて、娯楽として、また教育としての小説を提供しました。彼らがどのような教育観を抱きどのように教育に関わったのか、自らの教育的役割をどのように定義したのか、また作品においてどのように「教え」「学ぶ」という行為を表象したのかといった問題について、ディケンズやエリザベス・ギャスケルといった小説家を中心に研究しています。

そして、三つ目は文学の英語教材としての可能性に関する研究です。これは私が文学研究の傍らで英語教育学を学んだ経験から生まれた課題でした。作家が一字一句にこだわって書いた文学作品には、他の教材にはない魅力があります。それをいかに従来の訳読とは異なる方法で授業に取り入れることができるかという研究であり、実践です。私が特に関心を持っているのは、コミュニケーション能力育成のための文学作品の活用法です。「読書」とは一般的には個人が沈黙して行う内的な行為を指しますが、歴史的に見れば、こうした読み方はむしろ新しく、朗読によって一冊の本を皆で分かち合うという読書のほうがかつては主流でした。共同の営みとしての読書という原点に立ち返るとき、文学は新たな可能性を示してくれるのです。

2 私の授業

このようにして、「私の研究」は「私の授業」につながっていきます。文学には学生のレベルや授業の目的に応じてさまざまな活用法があります。全教科目の英語では、科目の種類によって教材が自ずと限定されるので、どの授業でも文学作品を使えるわけではありませんが、これまでいくつかの授業で、『ハリー・ポッターと賢者の石』、『チャーリーとチョコレート工場』など、学生にとって親しみやすい作品を用いて授業を行ってきました。このような授業においては、最初に内容に関する質問を用意し、グループで答えを考えてもらいます。普段、英語で会話をさせようとしても言葉が出てこない学生たちですが、こうしたアクティビティでは作品という題材があることで自然に英語が出るようになっていきます。そのあと、ロールプレイや朗読などのアクティビティを行うことで、さらなるコミュニケーション能力の伸張を図ることができるのです。

GC学部では一年間の留学を終えた学生に対して、コミュニケーション能力に加えて批判的思考力や論理的表現力の伸張を図る必要がありますが、こうした目的のためにも文学は役立ちます。たとえば、昨年度ゼミで使用した作品の一つに『赤毛のアン』があります。孤児のアン・シャーリーを主人公とした心温まる小説ですが、ポストコロニアル批評の視点からこの小説を再読すると、別の側面が浮かび上がります。年老いた兄妹が孤児を引き取るという設定の背後には、当時イギリスの慈善団体によって行われた、貧しい子供たちを植民地へ移住させる事業の歴史が秘められているのです。「ホーム・チルドレン」と呼ばれたこれらの子供たちは、しばしば受け入れ先でも差別的待遇を受け、過酷な環境のもと労働に従事しました。アン自身はカナダ生まれの孤児とされていますが、物語にはホーム・チルドレンへの人々の偏見を表した場面がいくつかあります。アンはこうした偏見のなか、いわば完全にアウェイの状態から出発し、卓越したコミュニケーション能力だけをたよりに自らの居場所を作っていきます。授業では小説の歴史的背景を俯瞰した後、アンのコミュニケーション戦略について、異文化コミュニケーションの理論を参考にしながら英語でディスカッションを進めます。一つのテーマに関して、作品をさまざまな角度から分析し議論する過程のなかで、高次のコミュニケーション能力が培われていくのです。

文学は言葉の芸術であり、時空を超えて人々の心に働きかける力を秘めています。これこそが究極の「コミュニケーション」だと私は思うのです。

地球と共生できる社会システムを目指して

長岡 延孝（ながおか のぶたか）
（女子大学現代社会学部教授）

1　自然豊かなキャンパス生活

ちょうど２０００年、女子大学に現代社会学部が開設されたのを機に、私は同志社に奉職しました。以来、経済学関連科目や公共政策などを担当させていただいております。まじめな学生が多い中、日常的に刺激を受けていますし、キャンパスでは季節の移ろいにつれて咲く花々や鶯の鳴き声などに癒され、すがすがしい気分になれます。また、時折しか出席できませんが、礼拝での奨励者のお話も、人の原点に立ち返ることのできる機会となっており、同志社ならではの良さを感じています。

研究面では、ヨーロッパの経済システムと環境政策の関わりを課題としてきました。ただ振り返ってみますと、テーマには紆余曲折がありました。はじめ大学で経済理論を学び始めたのですが、疑問に思うこともあったので歴史に遡って理解しようとしました。大学院ではフランスの経済思想史を研究して、修士論文にまとめました。しかし、現代的な関心が再び湧いてきましたので、ヨーロッパの経済政策を研究するようになりました。折しも地球温暖化などの環境問題がクローズアップされていた時期でしたので、地球環境と適合できる経済システムをどうすれば築けるのか、といった問題意識で研究してきました。

昨年、これまで発表してきた論文に基づき、ミネルヴァ書房から『緑の成長の社会的ガバナンス』と題する研究書を公刊することができました。小著のテーマは、北欧社会の分析を通じて持続可能な発展を目指す政策システムを構想するというものです。そのため、現場に足を運んで実際の動きを観察したり、担当者の生の声を伺ってきました。

2　研究を突き動かす疑問や怒りを大切に

昨年、３人の日本人が青色ＬＥＤ研究でノーベル物理学賞を受賞され、皆さん一様に苦闘や喜びを吐露されていました。そこで印象的だったのは、各人の強調されるところが異なっていたことです。赤崎さんは「好きなことを研究してきた」、天野さんは「社会のためになればいいと思って研究した」と述べられ、さらに中村さんは「研究の原動力に怒りがあった」というように、ユーモアを交えて語っておられました。これらの強調点は、いずれも研究者として重要な動機であると思います。私などは能力的にはこれらの学者の足元にも及びませんが、とにかくこれまで研究生活を続けてこられたのは、私もそれらを持ち続けていたからだと気づかされました。

基本的に私は学ぶことが好きなタイプの人間で、好きなことが仕事になることほど幸せなことはありません。それができるのは、当然周囲の人々のおかげですので、日々そのことにも感謝しています。また一見、研究はオタクのように見えても、なにがしかの形で社会への貢献や還元を意識しつつ遂行しなければはなりません。私の場合、少し言い過ぎかもしれませんが、何か社会のための捨て石のような存在になりたい、との思いから研究の世界に入ったことを思い出しました。

そして、とりわけ社会科学の分野では、社会の抱える諸問題に対する疑問や怒りが、研究への大きな原動力になります。私は京都近郊の農村に生まれ育ったのですが、その旧習に不自由さを感じることもしばしばありました。人間の自由の問題や、個人と集団の問題など、社会科学や哲学の根本的な課題を身に染みて感じました。

このたび研究をまとめようとしたのも、福島原発事故後にあらわになった日本の政治経済の在り方への疑問や怒りがありました。社会科学を研究する原動力として、正義感や公平性の希求、人間性の尊重、不正に対する怒り、より良い社会への熱望といったものが、根底に必要ではないでしょうか。

3　自発的な学びを誘発する教育を求めて

近年の教育では、いわゆるアクティブ・ラーニングが強く推奨されるようになりました。かつての講義は教員による一方的な口述が当たり前でしたが、双方向の意見交換や学生間の議論を活性化することによって、受講者自らの主体的な知的活動を引き出そうとするものです。筆者のような伝統的な教育を受けてきた者にとって、その実践には戸惑いもありますが、方向性は正しいかと思いますので、試行錯誤を続けているところです。

すでに多くの教員が実践していることですが、演習ではグループワークによって学生間のコミュニケーション力を向上させ、また工場見学などのフィールドワークに出かけることを通じて学習・研究と実社会との関連を実感できるようにしています。演習に比べると講義、とりわけ大人数の授業でアクティブ・ラーニングを実践するのは難しいのですが、大学やコンソーシアムなどによるＦＤ活動に参加して、事例を学ばせてもらっています。そして、質問を投げかける、コメント・ペーパーを用意する、映像資料で理解を深めるなどの方法で、少しずつですが試行をしています。

こうして大学の授業の在り方は次第に変化してきていますが、それでも一般的に言って、学生自身による自主的な学習意欲や研究への姿勢を十分に引き出せているとは、まだ言えない気がします。それには社会総体として、若者が小さい頃から学ぶことの楽しさと有益さを実感でき、また社会に出てもそれが正当に評価されるような仕組みや文化が必要ではないかと常々思っています。（写真は、フィールドワークの様子です。）

防災教育への取り組み

松倉（まつくら） 誠（まこと）
（香里中学校・高等学校教諭）

はじめに

東日本大震災以降、国民の生命を守ることを最優先課題とする政府は、ハザードマップ等を活かした防災教育を積極的に推進している。

本校では、中学1年生の日本地理、高校3年生の地理A等の授業で防災教育に取り組んでいる。以下、今年度私が取り組んだ中学1年生向けの防災教育を紹介する。

実践例　中学1年生・日本地理（週2単位、使用教科書　帝国書院『中学生の地理』）

授業の大まかな流れは以下の通りである。

2章1節「自然環境の特色①～⑤」日本の地形と気候の特色→4章「身近な地域の調査」地形図の読図→遠足で地図を用いて散策→2章1節「自然環境の特色⑥」ハザードマップと地形図を用いて自然災害と防災

以下、傍線部の部分について具体的な手順を紹介する。

生徒1人に1台パソコンを提供できる環境（本校では情報教室）で、「国土交通省　ハザードマップポータルサイト」にアクセスし、自分が住んでいる自治体のハザードマップをプリントアウトする。ハザードマップに自宅と避難場所を記入し、以下の3点を確認する。①自宅近くにどのような災害の危険性があるのか、②どの地域がどれくらい危険なのか、③避難場所周辺の状況。ハザードマップが公表されていない自治体もあるので、その場合は、自宅住所を寝屋川市香里南之町として、寝屋川市洪水ハザードマップを用いて同じ作業をする。

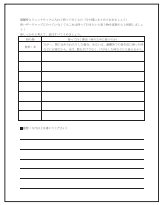
次に、「国土地理院　ウォッちず」のサイトにアクセスし、自宅と避難場所がのっている範囲の地形図を、1万分の1以下の淡色地図でプリントアウトする。地形図に自宅と避難場所を記入し、ハザードマップを見ながら危険区域の色ぬり（凡例もつける）を行う。その際、危険区域の地形的特徴（低地になっている、周囲に池や湖がないか、など）を地形図から読みとる。意外な場所が危険（または安全）なことがあるため、なぜその場所が危険区域になっているのか（なっていないのか）を考察する。

すべての作業終了後、危険区域をできるだけ避ける形で自宅から避難場所までの移動ルートを記入する。避難にかかる時間を計算するため、自宅から避難場所までの地図上の距離を測り、縮尺（1万分の1が大半）で計算し、実際の距離を算出する。分速70m（基本的な徒歩の速度）でおよその時間を確認する。実際に家族で歩いてみる。

【別紙「ハザードマップ（例）」「地形図（例）」を添付していますので、そちらをご覧下さい】

学習の過程（目安）

日本の地形と気候の特色　5～6時間
地形図の読図　3時間
＋遠足で地図を用いて実践
事前学習　今後の学習過程の説明　1時間
情報教室での作業　2時間
※加えて、家庭での学習（家族との話し合いや荷物の準備、避難行動の練習など）
事後学習　レポートの作成　1時間
（別紙　レポート用紙　参照）



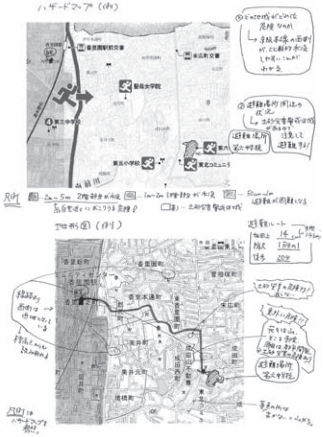
生徒の感想

「自分が住んでいる周りの地域が、こんなにもたくさんの危険がひそんでいることに驚きました。マンホールの近くを歩いてはいけないことなど、ホームページを読んで勉強になりました。そして、いざ避難をしなければならない状況になってからでは遅いということがわかりました。今決めておくことで、その時に冷静な判断ができるようになり、被害を少しでもおさえることができると思いました。」

「避難のときに持って行くリュックサックは前から用意していましたが、今回改めて家族と話し合う良い機会になりました。土砂災害や洪水についてよく学べたので、今度は南海トラフの地震について調べてみたいと思いました。」

「家族と避難についてこんなに話したことがなかったので、とても良い機会になりました。自分の家が意外に危険だったこと、避難場所や避難のときの持ち物など、家族でたくさん話し合いました。」

「家ではエマージェンシーシートや電池、食料やトイレットペーパー、ティッシュなどは常に多めに備蓄していますが、ラジオなど、まだ必要なものが色々とあることがわかりました。家族で話し合って、家にいる時よりも帰宅途中などに災害にあったとき、自分がきちんと対応できるかが心配だと言われました。」

「NTTが、被災地との間で伝言を伝える「災害用伝言ダイヤル（171）」をつくってくれていることが勉強になった。調べてみると、練習する期間も設定されているようなので、またやってみたいと思う。」

「今回の勉強がなければ、もし洪水などの災害の時に、どこに何をもって逃げればいいのか、パニックになっていたと思います。それから、普段暮らしているこの生活はすごく便利で、ありがたいものので、感謝しなければいけないことなんだと思いました。」